

勇者部と黒い桜の勇者

kirika

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

讃州中学勇者部

毎日みんなの為にすることを勇んで行っている

そんな楽しくて平凡な日常が続けばよかった…

でもそんな日常は一瞬で崩れ去った

目次

オリ主設定	1
讃州中学勇者部	3
平凡な日常	5
始まる『非』日常	10
封印の儀式	17
告げられた事実	22
親友	30
久々の休息	38
思い返す過去 『初戦闘』	41
思い返す過去 『連携』	45
思い返す過去 『日常』	50
思い返す過去 『合宿』	57
思い返す過去 『罪』	67
思い返す過去 『終わり』	71
讃州中学勇者部	74
海での出会い	77
お知らせ	80

オリ主設定

黒崎 桜華 (くろぎき おうか)

中学3年生

小学時代にバーテックスの仕業によって両親を亡くし1人暮らしをしている。(讃州地区に大赦が一戸建てした家に暮らしているが、両親と暮らしていた家はまだ残っている)

週1で両親の知り合いだった人が経営している老人ホームの手伝いをしている。(勇者部の活動内容の1つとなっている)

讃州中学に入学し風と同じクラス。

だが、年齢が風の1歳下である。これにはとある理由がある…

風から勇者部創設に誘われてそのまま勇者部に所属。

中1の時に風の妹の樹とも出会い仲良くなった。

見た目が、女物の服を着ると完全に女子。

そのため初めは東郷以外には性別を間違えられた。

(桜華は昔からのコンプレックス)

クラスメートの男子の何人かも今だに勘違いしててたまに告白してくるバカもいるらしい。(その時に告白してきたのが男子だった場合そいつをフルボッコと噂が絶えないらしい…)

風とはほとんど毎日夫婦漫才をしていてクラスの皆からは飽きられている。(桜華は毎回「夫婦じゃねー!!」と反論している。風は顔を赤くし乙女の反応を繰り返している。桜華からは「お前も反論しろよ」と言うが「乙女心をいい加減に理解しろ!!」と理不尽なツッコミを受けている)

樹とは勇者部設立の時に風の家は何度も行っていた為に樹が讃州中学に入る前から知り合っている

初めは桜華を女子だと勘違いしていた為に色々あった…

男だと知った当初は怯えていたが桜華の優しさに触れて彼に対して何か感じている(本人はまだ何なのかは解っていない)

友奈と東郷は2年目の部員勧誘と時に出会った。友奈には男だとバラした時には盛大に驚いていた。風からは毎回「桜華は友奈を甘やかし過ぎ!!」と言われているが桜華はそうは思っていない。

東郷と初めて会った時に一目で『須美』だと解ったが神樹様に記憶を『供物』とし取られていると知ってからは彼女を混乱させないよう『東郷』として接している…

勇者姿 カラー 黒

小学時代に、銀・園子・須美（東郷）と共に『お役目』をしていた。その時、桜華の力は『大赦』が制限していた…。

精霊 （姿は境ホラのハナミ） 名前 桜（さくら）

『大赦』が精霊を出し始めた時に神樹様から生まれた謎の精霊。

桜華に凄くなついている。人形だか話すことはできない。

何の為に生まれ、何故桜華になついたかは『大赦』も知らない…

武器 日本刀（鞘有り）

桜華は我流を使っている。得意な型は抜刀術

桜の力を使うと刀身が黒い桜の花びらに分かれ、触れたものを斬つていく。

讃州中学に入り『大赦』から2段階目の力を解放するところができると聞かされたが代償が……………。

讃州中学勇者部

昔々 ある所に勇者がいました。

勇者は人々に嫌がらせを続ける魔王を説得するために旅を続けています。

そしてついに勇者は魔王の城に辿り着きました。

「やつとここまで辿り着いたぞ魔王！ もう悪いことはやめるんだ！」

「わしを怖がって悪者扱いを始めたのは村人たちの方ではないか」

「だからといって嫌がらせはよくない。話し合えばきつと村人たちもわかってくれる！」

「違う!!話し合ってもまた悪者にされる！」

「君を悪者になんか…しない!!」 ガタツ!!

「あつ…」 バターーーン!!

「し…しまった…」

「えー…と 風先輩どうしよう…」

「ミスったのはしようがないけど子供たちに当たらんなくてよかったあ」

「うう…とん…とん…」

よ…よし今だツ

勇者

キーーーーック!!」

「ちよ…おまつ話し合おうってさつき言ったじゃないか!？」

「い…言っても聞かないから！」

「何言ってるの!? 台本通りの展開ならきくわよ！」

「……………」

「ふ…ふたりとも…何がどうなって…」

「あつちやく…アツチ側パニックってるなくまあ東郷がいるから任しても大丈夫かな」

「樹ちゃん 落ち着いて音楽流して」

「わ…わかりました」



「みんな！一緒に勇者を応援しよう！」

「がーんばれ がーんばれ がーんばれ」

「うぐぐ…みんなの声援がわしを弱らせるうぐぐぐ」

「今だ勇者パーパーンチ!!」

「パーパーというわけで みんなの力で魔王は改心し祖国は守られました」

「みんなのおかげだよ！」

「万歳パーパー！ 万歳パーパー！」

こんな感じで校外活動に青春を燃やしている私達

3年生で部長の犬吠埼 風（いぬぼうぎき ふう）先輩

この舞台のお話を考えたしっかり者

後輩で部長の妹 樹（いつき）ちゃん

お姉ちゃんのこと大好きなんだ

そして私の大親友 東郷（とうごう）さん

去年中1の時に隣に引っ越して来た

大親友でも名字呼びなのは本人の希望

最後に……

「よし！みんな人形劇が終わった後はお食事会だ」

「たくさん作ったからいっぱい食べてくれ」

「うわーおいしそう」

「お姉ちゃん ありがとう」

「俺とケツコンしてください！」

「どういたしましたして あとそのふたり俺は男だからね」

そしてこのクラブ唯一の男の人で目の前で子供たちにとってもなっ

かれているのが黒崎 桜華（くろぎき おうか）先輩

勉強 運動 さらに料理まで何でもこなす凄い先輩

見た目が女の人の人なので勘違いする人を多い

（現に私も最初は間違えてしまった…）

とまあ私達はみんなのためになることを勇んで実施するクラブ

パーパー『讚州中学勇者部』なんです！

平凡な日常

~~~~~♪~~~~~♪~~~~~

「今日の授業はここまで 日直 号令」

「起立 礼 神樹様に 拝」

「課題忘れないようにな」

「ほら!!桜華早く行くわよ!!」

「そんなに急がなくてもいいだろ、風」

「部長が遅くいったら顔が立たないわよ!!」

「そんなことないと思うけどな…」

「ほら行くわよ!!」

「はあわかつたよ…」

—————

「友奈!今度の校外試合 助っ人お願い」

「わかつた!」

「今日もそつちの部? なんだっけ えーと…」

「勇者部だよ!!」

「うーん 何度聞いても変な名前よね」

「そんなことないよカツコイイじゃん!! とりあえず助っ人了解!!  
じゃね〜」

家庭科準備室

勇者部部室

「こんにちはー友奈 東郷 入りまーす」

「おー来たかー」

「授業お疲れ様 はいお茶」

「ありがとうございます 桜華先輩」

「いただきます」

「いやー昨日の人形劇 大成功でしたね!」

「何もかもギリギリだったわよ いやむしろNG…」

「友奈ちゃんのアドリブで盛り上がりましたね」

「あれは無茶苦茶と言うんだ…」

「まあいいんじゃないか　あの状態からみんなを楽しませたんだから」

「そうですねよ!!みんな喜んでくれたし　結果オーライ!勇者はクヨクヨしてもしよーがない!」

「友奈さんは底抜けにポジティブですよね」

「友奈は元氣過ぎなのよ…桜華も友奈を甘やかさない!!」

「はいはい」

「よし♪今日のミーティング始めるわよ」

本日のミーティング

子猫の飼い主探し

「うわあ〜かわいい〜」

「未解決の飼い主探し依頼がどっさり残ってるわ」

「た　…たくさん来たね…」

「ということ　今日から飼い主探し強化月間にするわよ!」

「東郷　毎回悪いがホームページの強化は任せられるか」

「携帯からアクセス出来るようにモバイル版も作ります」

「悪いなこんなこと任せて…」

「いえいえ　私も楽しいですよ♪」

「そうか…」

「私達は…」

「どうしましょう…」

「そうだ!　私達海岸の掃除に行くでしょ　そこでも人にあたってみようよ」

「いいですね」

「この子達のためにも!」

「がんばりましょう」

「ええ子達や〜」

「何言ってるんだよ…」

「何も〜」

「?」

「出来ました」

「早っ!!」

「みやすい!」

「さすが東郷…」

「すごいですね〜」

「よしこつちも東郷に負けないように子猫の飼い主探すとしますか」

「お〜!!」

部活終了後 とあるうどん屋

「なかなか見つかりませんね〜」

「まあそんな簡単には見つからないか」

「〜とところでさ文化祭の出し物の事なんだげど」

「もう そんな話?」

「:3杯目 もう食べ終わってる:」

「夏休み入る前にさ いろいろ決めておきたいんだよね やっぱ

準備が大事でしょ」

「確かに常に有事に備える事は大切です」

「去年はバタバタしていて何も出来なかったからね〜今年は猫の手も

入ったことだし」

「私!」

「そうだな 音楽関係の機能持つてる樹ちゃんが入ってくれたのはあ

りがたいな」

「桜華先輩まで〜」

「今年こそですね!」

「せっかくだから一生の思い出になる事がいいよね」

「私達の部活動をスライドで上映とか?」

「甘い」

「ふええ」

「娯楽性のないものに大衆はなびかないですね」

「これは宿題ね それぞれ考えておくのよ」

「はあい」

「わかりました」

「了解」

「よしっすみませーん おかわり！」  
「4杯目!？」

「それでは失礼します」

「また明日 風先輩 樹ちゃん 桜華先輩」

「また明日ね〜」

「お疲れ様でした〜」

「じゃーなー」

「よしっ私らも帰りますか」

「じゃーなお二人さん」

「また明日ね桜華」

「また明日です」

「…樹 夕飯何作ろうか」

「お姉ちゃん まだ食べるの!？」

~~~~~♪~~~~~♪~~~~~

「おっと ちよつとごめん」

「……また『大赦』からのメールか

「お姉ちゃん…?」

「あ…ううん何でもない

…ねえ樹 お姉ちゃんに隠し事があつたらどうする?」

「…えつと よくわからないけど…」

「例えば甲州勝沼で援軍が来ないのに戦えーって言わなきゃいけなかったとして」

「……………」

「近藤 勇」

「……………」

「あはは 何でもない…」

「ついていくよ何があつても お姉ちゃんしか家族いないし」

「……………」

「変なお姉ちゃん」

~~~~~♪~~~~~♪~~~~~

~~~~~♪~~~~~♪~~~~~

「あ　友奈から」

「またオモシロ画像かなあ」

まあそうそう『アレ』には当たるものじゃないわよね…

始まる『非』日常

「それでは黒板に書かれている3つの文を――」

(勇者部らしい出し物　なんかないかな)

カレーネコ「ボクをくえ」

(もつとこうみんなが喜ぶ楽しい何か…)

「？」

「あはは…なんでもない！」

「クスツ」

「結城さーん　なんでもなくないですよー

　　じゃ教科書読んでも

らおうかしら」

「はい「〜♪〜♪〜♪」えっ私の!?!」

「携帯ですか？授業中は電源を切っておきなさい」

「はいっすいません　いま止めま…　あれ？」

樹海化警報

なに　これ…」

……………シーン

「え…　み…みんなどうしたの？」

「何だか様子が……………」

—————

「全員『止まって』いる……………これはまさか!?!」

「樹!!」

「待てよ風!何処に行く気だ!!」

「あんたも来なさい!!」

「わかったよ!!」

まさか　まさかそんな

「樹!!」

「お姉ちゃん!先輩も!!　　よかった…お姉ちゃん達は無事だった

…　あのねクラスの皆が…」

「樹よく聞いて

私達が『当たり前』だった……!」

「え…なんのこと…?」

「2人はここにいろ!!俺は友奈と東郷を探しに行く!!」

「待って桜華!!『アレ』が来る!!」

「なにあの光?…お姉ちゃ…!!」「樹!!」

「東郷さん!!」 「友奈ちゃん!!」

「……………」

「何これ!? 何処ここ!? 私また居眠り中?

ギュー

いってててて!! ゆ…夢じゃないみたい…?」

「…教室にいたはずなのに……………」

「大丈夫だよ!東郷さんには私がついてる!」

「…友奈ちゃん」

「友奈!東郷!」

「2人とも無事か!」

「樹ちゃん!!風センパ…イ!! 桜華センパ…イ!!」

「よかった…携帯を手放していたら見つけられなかった」

「…ケイタイ?」

「このアプリにこんな機能があったんですか」

「その隠し機能はこの事態に陥った時に自動的に機能するようになってるの」

「部に入った時に風先輩にダウンロードしろって言われた物ですよ
ね」

「…風先輩は何か知っているんですか ここは一体どこなんですか?」

「……」

「…みんな落ち着いて聞いて 私は…」

『大赦』から派遣された人間なんだ」

『『大赦』って神樹様を奉っているところですよね?』

「…なにか特別なお役目なんですか?」

「樹ちゃんは知ってたの?」

「ううん　今はじめて…　桜華先輩は…？」

「……………」

「…当たらなければずっと黙っているつもりだった…」

でも　私の班が…讃州中学勇者部が当たりだった」

「あの…班とか　当たりとか一体…」

「今見えているこの世界は神樹様を作った結界」

「…じゃあ悪い所じゃないんですね？」

「ええ…でも神樹様選ばれた私達はこの中で敵と戦わなければならない…　この世界には私達しか存在しない」

「他に誰もいないの？お姉ちゃん」

「…あのこの乙女型って点は何ですか？」

「アレだ」

「来たわね…」

「敵ってまさかアレ…ですか？」

『バーテックス』世界を殺すために攻めてくる人類の敵よ…」

「世界をコロスって」

「お姉ちゃん　ずっと一緒だったのにそんなの今まで聞いたことないよ…」

「今　初めて話したからね　バーテックスの目的はこの世界の恵みである神樹様に辿りつくこと」

そうなった時　世界が…死ぬ」

「…そんなあんなのと戦えるわけが…」

「大赦の調査で私達が最も適正かあると判断されたんだ　戦う意思を示せばこのアプリの機能がアンロックされ『神樹様の勇者』となる」

(勇者…)

「!!　みんな!!伏せろ！」

「きゃあ!!」

「ってあれ？　爆風が来ない…？？」

「……風『アレ』は俺がやる…今のうちにみんなと下がれ」

「桜華…」

「何これ…黒い桜…?」

「…桜華先輩?」

「悪いな風 皆も…後で説明する!!」

「桜華!? 待ちなさい!! 友奈!!ここはまかせて東郷を連れて逃げ

て!! 早く!!」

「は…はい!!」

「樹も一緒に行つて!!」

「だめ!!お姉ちゃんを残して行けない!! ついていくよ

何があっても …どうしたらいいの?」

「…私達は神樹様に守られているから…大丈夫 樹!!続いて

!!」

「わ…わかった!!」

「すごい!!変身しちゃった!?これが神樹様の守り?」

「そう このアプリは選ばれた私達だけが起動させる事ができる」

「わっ何か現れた!? 何コレ!」

「この世界を守ってきた力 『精霊』 神樹様の導きで私達に力を貸
してくれる攻撃の力!!」

戦い方はアプリが教えてくれる 一緒にいくよ樹!!」

(桜華のやつ後でじゃなく今聞いてやるんだから)

「わーーーーっ!!待ってよお姉ちゃーん」

『『コイツらはまた人に不幸を運んでくる!!今度は一匹残らず殲滅し
てやるよ!! 桜!! 『散れ!!』』

(桜の能力　刀身を桜の花びらに分裂させて中距離で各所に斬撃を与える　一気に『封印』まで弱らせる!!)

「こんのー！ー！ー！！」

「!?　風!!なんで……下がれって言ったろ!!」

「ええーい!!」

「樹ちゃんまで!」

「先輩!!大丈夫ですか!!」

「なんで来た!?　俺は皆を守りたいから1人でやるって言「てい」つ

てー!!何するんだ風!!」

「あんたが皆を守りたいと思ってるんだったら　私も勇者部部长としてあんたや皆を守るためにここにいます!!」

「私も守られているだけじゃ嫌　先輩を守る!!」

「風……樹ちゃん……　わかった　その代わり無茶だけはやめてくれよ?」

「了解!!」「はい!!」

「よしっ　行くぞ!!」

「……………」

「本当にここには私達しかいないみたい……」

「風先輩!!　そっち大丈夫なんですか?　バーナントカつてのと戦ってるんですか?」

「こっちは桜華と樹の3人でなんとかする!!　そっちこそ東郷は大丈夫?　　できるだけ離れて!!」

「……ごめんなさい私……　怖くてできない……　ごめんなさい……」

「東郷さん!!いいよそんなの誰だって怖いんだから　ね?　さあ早く安全な場所に行こう!!」

「……友奈……東郷　黙っていてごめん」

「安心しろ2人とも俺が必ず守ってやる!!」

「桜華先輩……でも私……」

「東郷……お前がそんなに不安がってたら友奈のポジティブも段々ネガティブになっちゃうぜ　東郷は『昔』から常に強気になつてないとおかしいぜ」

「先輩……………」

「そうだよ東郷さん!!　それに風先輩はみんなのためにと黙ってたんですよね　こんな大変な事ずっと1人で打ち明けることも出来ずに

それって……………」

勇者部の活動目的通りじゃないですかっ　風先輩は悪くない!!」

「友奈……………」

「風!!　「お姉ちゃ……………」きゃああ」樹ちゃん!!　桜『散れ』!!」

……………コイツ硬え…『今』の『桜の状態』じゃ…まだ『12体』も残ってるから『アレ』はできない…

「桜華先輩の攻撃が効いてない…!!」

「こ…こつちにくる…?」

「友奈ちゃん!!私といたら友奈ちゃんが危ない　私を置いて行つて!!」

「できないよ東郷さんを置いてなんて!」

「お願い逃げて友奈ちゃんが死んじゃう!!」

友奈ちゃん!!」

やばい友奈達に近すぎた!!攻撃が…

「しまった!!友奈!!東郷!!」

「友奈ちゃ……………」

「ここで友達を見棄てるような奴は　勇者じゃない!!」

「…友奈ちゃん……………」

「友奈!!お前も…」

「嫌なんだ!!　誰かが傷つく事!!辛い思いをする事!!みんながそんな思いをするくらいなら

私が頑張る!!」

「友奈ちゃん…どうして」

勇者部の部活動はみんなのためになる事

だから勇者部が好きなんだ

私は進んでこの部に入ったんだ

「勇者…パーンチ!!」

だからみんなを守るために…私が勇者になる!!

封印の儀式

友奈の攻撃によってバーテックスの身体が大半崩れた
なんちゆう剛力手にいれてんだ友奈は……
でもあの力は俺にとつては助かるな

「友奈さん凄いバンチ!!カッコイイ」

「何だか力がみなぎってきた!!」

これならきつと私も戦える…!!

あの怪物を倒さなきゃ

「気をつけろ!!あの程度じゃ『バーテックス』は倒せない!!」

「え?……!?!砕けた所が治ってる!!」

「バーテックスは攻撃しても回復する!!『封印の儀式』っていう特別な手順を踏まないと『絶対』に倒せないの!!」

「て…手順ってお姉ちゃ…きや!!」

「説明するから攻撃避けながら聞いて!!」

「ふええそんな器用なことできないよ」

風 流石に初戦闘でそんなこと出来るわけないだろうが…仕方ない
い

「俺がアイツを引き付けるその間に樹ちゃんと友奈に説明してくれ」

「わかったわ!!じゃ足止めヨロシク!!」

「えっ!?!お姉ちゃん!?!」

よしっ!!風が説明してる間コイツの足止めしますかな

「……………みんな…友奈ちゃん…」

駄目…私 戦うなんて できない…!!」

〔桜華2人に説明終わったわ!!これから『封印の儀式』始めるわよ!!〕

「わかった」

説明を聞いた2人が敵を囲むまでもう少し頑張るとしますか!!

「封印するための手順その1…まず敵を囲む

位置につきました!!」

「ごつちもついたよ!!お姉ちゃん!!」

「よしっ!!封印の儀いくわよ!!教えた通りにね」

「了解!!」

封印の儀式が始まったか…風の奴『あの事』はちちゃんと言ったのか
?

「えーと手順2 敵を押さえ込む為の祝詞を唱えるんだよね?つて!!
うわああ…長っ!?こんなにあるの!!」

「かくりよのおおかみ あわれみたまい」

「めぐみたまい さきみたま くしまたま…」

「おとなしくしろ　コンニャロー!!」

「そ…それでいいのーーツ!?」

「魂込めれば言葉は問わないのよ!!」

「やっぱり風め…この事詳しく言わなかったか…まあアイツなら見せた方が早いと思っただんだな…つと今の一撃で『出てきたな』」

「な…何か出た〜!!」

「封印すれば『御霊』がむきだしになる　あれはいわばバーテックスの心臓　破壊すればこっちの勝ち」

「もう少しだ!!」

「それなら私がいけます!!　　くらええ〜!!」

友奈の攻撃ならすぐに破壊できるだろ…「ガンッ」

は……?

「かったー…いい!!固すぎるよコレ〜」

「おいおい!?あの馬鹿力で壊れないのかよ!!どんだけ固いんだよあの御霊!!」

「…お姉ちゃん何か数字が減ってるんだけどコレ何の数字?」

「それ　アタシ達のパワー残量!!0になるとコイツを押しえつけられなくなつて倒せなくなるの!!」

「ふええ〜ということは…」

「コイツが神樹様に辿り着き全てが終わる!!」

あと38秒か…早くコイツをやらないと…せめて罅さえはいつてくれれば…

「くらえアタシの女子力を込めた渾身の一撃をー!!」

何だその一撃…でも罅が入った充分だ!!友奈も気づいたなあとは俺達でやれる!!

「あれ…周りの木々が…枯れてる?」

「はじまった!!急がないと…長い間は封印していると樹海が枯れてげんじつせかいに悪影響がでるの!!」

神樹様…どうか皆をお守りください

「もう時間がない……………ツ!!はああああ!!」

こわい…痛い…でもみんなを…守るんだあ!!

「どうだっ!!」

「駄目だ完全には碎けてない!!」

「そんな…………」

「充分だ友奈!!あれなら…桜!!『散れ』!!」

「桜の花びらが!!」

あんだけ罅がでかいなら桜の花びらも中に入るだろ!!

どんだけ外装が固くても内側はそうでもないだろ!!

「壊れるーッッ!!」

バキンッ!! ザー

「砂に…なってる…」

「友奈さくくん!!」

「樹ちゃん!!」

「ふう…固い敵は苦手だ… お疲れ様 桜」

「桜華くっ!!」

「風 お疲れ様…悪いな何かいろいろと…」

「それでもないわよ!!桜華がいなかったらさらにヤバイと思っ

…」

「まあ全員無事だったんだからよかったですだろ!!」

「それもそうね♪」

「勝ったの?…よかった…」

さてと周りがザワついてきたな元の世界に戻るのか…さて…皆に
どう説明しようかな…

告げられた事実

「あ…あれ？ここって…」

「学校の屋上？」

「神樹様が戻してくださったのよ」

「なんだ…教室に直に戻してくれるものではないのか…」

「まあ『昔』からそうだったけど…」

「東郷さん!! 無事だった？ケガはない？」

「友奈ちゃんこそ…」

「うん!!もう安全!!…ですよね？風先輩」

「ええ ほんら周りを見て」

「…皆 今の出来事に気づいてないんだ…」

「他の人からすれば今日は普通の日 アタシ達で守れたんだよ 皆を

…日常を!!」

「よかつたあ…!!」

「やっぱり『追い返す』とは違って『倒す』っての守れたって実感が
でてくるな…」

「ちなみにこつちの時間は止まったままだから今はモロ授業中だと思
うけど」

「えええ!？」

「許せ友奈…勇者の定めだ…」

「まあ後でフオロー入れておくわ」

「お姉ちゃん!!怖かったよお…」

「よしよし よくやったわね……冷蔵庫のプリン半分食べていいか
ら」

「うう…あれ元々私のだよ…」

「無理もないか…気弱な樹ちゃんにいきなりバーテックスとの戦闘
なんだから…」

私は…何も出来なかった………

……… 『須美』 お前は俺が守ってやる…

「さてと!!桜華から色々聞くことがあるけど皆の気持ちの整理が必要
な感じがするから詳しくは明日にしましょうか!!」

「その方が良さそうだな…」

「その代わり明日きっちり教えてもらおうわよ!!桜華!!」

「わかったから!!ほら教室戻るぞ!!」

「はくしい」

ー翌日ー

「隣町で昨日事故があったじゃない？私近くにおいてビックリしちゃった」

「えっ　あの2、3人怪我したってやつ？」

「そっちにメール送ろうとしたら電池きれてて〜」

「あるある」

……東郷さん今日は朝から元気が無い気が…

家庭科準備室

勇者部部室

「友奈さん　その子なついてるんですねえ」

「えへへ　牛鬼っていうんだよ」

「可愛いですねえ」

へえ『今』の精霊は随分可愛くされてるんだな〜

「ビーフジャーキーが好きなんだよ」

「牛なのに!?!」

前言撤回…精霊はモノ食わないぞ…桜と同じ特殊なのか…

「……さてと　まずは皆『元気』でよかった

早速　昨日のことを説明していくわ」

さて、風からの説明をまとめると…

・パーテックスは人類の天敵で『壁』を越えて『12体』（1体倒したので残り11体）攻めてくることが神樹様のお告げでわかっている

・バーテックスの目的

神樹様の破壊Ⅱ人類の滅亡

・それを防ぐ為に大赦が造ったのが

神樹様の力を借りて勇者と呼ばれる姿に変身するシステム

通称『勇者システム』

・注意事項として

戦闘中に結界としている『樹海』が何かしらダメージを受けると日常に戻った時何かの災いとなって現れる

「とまあ派手に破壊されて大惨事なんてことにならないようにアタシ達勇者部頑張らないと!! 大赦側もサポートに動き始めてるから」

「その勇者部も 先輩が意図的に集めた面子だったというわけですね?」

「……そうだよ適正値が高い人はわかってたから アタシは神樹様をお祀りしている大赦から指令を受けてるの この地域の担当として……」

「……知らなかった」

「黙っててごめんね……」

「次は敵 いつ来るんですか?」

「――明日かもしれないし 1週間後かもしれない そう遠くはないはずよ」

「なんで……なんでもっと早く勇者部の本当の意味を教えてくださいなかつたんですか!!」

友奈ちゃんも樹ちゃんも死ぬかもしれないなかつたんですよ!!」

「……ごめん でも勇者の適正が高くてもどのチームが神樹様選ばれるか敵が来るまでわからないんだよ……むしろ変身しないで済む確率の方がよっぽど高くて……」

「そっか各地で同じような勇者候補生が……いるんですね」

「……人類の存亡の一大事だからね」

「でも……こんな大事なこと ずっと前から黙っていたんですか……!!」

「東郷!?!」

「待て風…東郷は友達があんな目にあつたのに自分だけが何も出来なかつたから言つただけなんだ…」

友奈 悪いけど東郷追いかけてくれるか『大親友』のお前ならでき
るだろ」

「……ッ!! はい行つてきます!!」

「さてっどうする風…俺としては全員揃つてから話したいんだが…」

「今はいいわ…東郷があんなだし…それでも桜華が

勇者だったとはねえ 普通は純粋な女の子しかなれないのに?」

「大赦曰く『特殊』だそうだ」

「へえ〜『大赦』からは桜華が適正値が高いことしか聞いてなかつたか
ら」

「……でもあの時に力があつたら『アイツ』を失わずにすんだのに
……ボソツ」

「何か言つた?」

「何でもない…」

「とりあえず…どうやって東郷と仲直りするべきか…」

「普通に謝れば東郷だって許してくれるだろ」

「それだと何かわからない私のプライドが許してくれないのよ〜!!」

「……お茶淹れてくるわ…」

はあ変な所でプライド高いなウチの部長様は…

「……………」

「はい、東郷さんコレ私の奢り」

「え…でもそんな」

「さつき東郷さん私の為に怒ってくれたから……………ありがとうね
東郷さん」

「……………ああ　なんだか友奈ちゃんが眩しい」
「?……………」

「あのね　私昨日ずっとモヤモヤしてたんだ…このままずっと変身
できなかつたら　私は勇者部の足手まといになるんじゃないかっ
て…」

「だからさつき言ったのも　そのモヤモヤを先輩にぶつけたところ
もあつて…酷いこと言っちゃった…」

「東郷さん…」

「友奈ちゃんは皆の危機に変身したのに…国が大事な時なのに…」

「と…東郷さん?」

「私は…私は…変身するどころか…　敵　前　逃　亡…………」

「東郷さーん!」

「風先輩の仲間集めだつて国や大赦の命令でやっていた事だろうに…
ああ私はなんて事を…」

「わーっ!そうやって暗くなったらダメー!!」

「えくくと　そうだ!!　元氣の出るものを見せてあげるね!!きっと凄
く楽しくなるよ!!」

「牛鬼を服の中に入れ「ほら見て私のバストがホルスタイン♪」と
言った……………」

「……………私の為にこんなネタまでやらせて　ほんとごめんね…」

「あああ!!逆効果!?どうしよう!!」

「…………友奈ちゃんは大事なことを隠されていて怒ってないの?」

「んくそりや驚きはしたけど…でも嬉しいよ!!この適正のおかげで
風先輩は樹ちゃん　桜華先輩に会えたんだから」

「この適正のおかげ…………」

「うん!!」

「私は……中学に入る前に事故で足が全く動かなくなって 記憶も少し飛んじやって…: 学校生活を送るのが怖かったけど 友奈ちゃんがいたから不安が消えて…:

勇者部に誘われてからは学校生活がもっと楽しくなったんだ…: そう考えると適正に感謝かも」

「これからも楽しいよ!! ちよつと大変なミッションが増えただけで」

「……そっか そうだね 友奈ちゃんって本当に前向き」

「やつと笑顔になったね東郷さん!! やつぱり東郷さんは笑顔じゃなきゃ!!」

おい風…: 俺がお茶淹れてる間何してんだよ…:

「皆…: 説明足りなくてごめんね…」

………: 軽すぎてもっと怒っちゃうかな…:

皆…: 本っ当にごめんなさい!!

…: 低姿勢すぎるなあ…: 困ったく…: どうやって仲直りしよう…: 樹 どうするべきか占えた?」

「今 結果でるよ いかにしてお姉ちゃんと東郷先輩が仲直りする

か……」

全力で精霊に謝ってるのか……てか謝るのに占いする必要ないだろ

…

「……あれ？カードが動かない……」

~~~~~♪~~~~~♪~~~~~

~~~~~♪~~~~~♪~~~~~

「!? まさか!!」

樹海化警報

「そんな!? 2日連続でバーテックスが!!」

親友

2日連続でバーテックスが出てきた…

またあの時の『災厄』が来たのか…

でもあの時とは違う…

「3体同時に現れたか…」

そうまさかの複数の敵が同時に現れた

数で言えばこっちは勇者4人まだ有利であるが戦闘経験が少なすぎ…

俺が頑張るしかない!!

もうあの悲劇は繰り返させない!!

—————

「友奈ちゃん…」

「この感じ…また敵が現れたってことだよね…」

私が東郷さんや皆を守るために頑張らないと…

「はあああ 変身!! 東郷さん待っててね 倒してくる!!」

「ま…待って 私も…」

「大丈夫だよ東郷さん いてくるね」

「友奈ちゃん…ツ」

—————

「風先輩!!」

「友奈!! 東郷は?」

「大丈夫です 安全な所にいます!!」

「わかった それじゃ遠くにいる奴は放つといてこの2匹まとめて封印するわよ!!」

「はい!!」

………何だこの違和感…後ろの敵は進行速度が遅いだけなのか?
違う!!

「風 避ける!!」

「うわっ!?! アイツ何か飛ばしてくる!!」

遠距離からの攻撃!! アイツを先にやらないと……

「い!! いっぱいきたあああ〜!!」

「くそ!! 風 後ろの敵は俺がやる他の2体足止めしててくれ!!」

「足止め? こんな奴らすぐに終わらしてやるわ!!」

全くウチの部長様は威勢がいいな… 待つてろよ!!

—————

「よしっ桜華が戻ってくる前にこっちは終わらせるわよ!!」

「はい!!」

やっぱり桜華先輩は凄い!! 敵に1人で立ち向かうなんて私も頑張らないと!!

「こんの〜!!」

このエビ? を叩こうとした時

「友奈さん!! 危ない 後ろです!!」

「へ? きゃああああ!!」

しまった…まさかあの尻尾があそこまで動くなんて…

「友奈!!」

「友奈さん!! きゃ」

「樹!! 気をつけて!!」

くそ…友奈を助けに行きたいがもう1体が邪魔をする…桜華ごめん…以外にもたないかも…

「友奈ちゃ…!!」

「くう いったあ…」

早く移動しないと次の攻撃が…でも体が…

「ガキイイイン!!」

牛鬼…? こんのお動け!! 私の体!! 動けえ!!

「友奈ちゃん!!」

「このままじゃ友奈ちゃんが…!!」

「……………や…」

《過去回想》

「あつ　もしかしてあなたが新しいお隣さん？」

「あ…はい」

「私は結城友奈　あなたは？」

「東郷…美森です…」

「東郷さんかく　この辺よくわからないでしょ　案内するよ　任せ
て!!」

《回想終了》

「…やめ…て」

「このままじゃ本当に…友奈ちゃんが…」

「…やめろ…」

友奈ちゃん!!

「友奈ちゃんをいじめるな…!!」

東郷さん!? 駄目　敵に見つかった!!　間に合わない!!

「キイイン!!」

え…? あれは…東郷さんの精霊…

「私はいつも友奈ちゃんに守ってもらった…」

だから次は私が勇者になって…」

「東郷さん…」

「友奈ちゃんを守る!!」

……………コレが勇者の力

どうしてだろう　変身したら落ち着いた…

「この武器を持っているから? でもそれより…」

「もう友奈ちゃんには手出しさせない!!」

わかる この精霊達の力の使い方が…頭の中に入ってくる
「す…凄い東郷さん これなら…」

「あーもーコイツしつこい!! しつこい男は嫌いなよ!!」

「モテる人つぽく避けてないでなんとかしようよお姉ちゃん」

「なかなか隙が…:…ん? ひああ!? 何か降ってきたあ!?!」

「風先輩くくそのエビ運んできたよくくっ!!」

「どう見てもサソリでしょ!! って…」

「東郷先輩…」

「援護は任せてください…」

「…東郷 戦ってくれるの?」

「コクツ」

「…:…東郷 わかった援護お願いするわ!! よくしさと終わらせて
桜華の方に行くわよ!! 散開!!」

「OK〜」

「皆 不意の攻撃には気をつけて!!」

「はいっ!!」

「ちよ…:…あたしのより返事がいい!?!」

「…:…:…コイツらが皆を苦しめた おとなしくしてて…!!」

「御霊が出た!!」

「こつちも出ました!!」

「よくし 行きます!!」

これさえ壊せば!!

「えい!!」 スカ…

あれ!?何のもう1回!! スカ…

「はっ!!」 スカ…

「…このっ」 スカ…

「この御霊微妙に避ける〜!!」

「かわって友奈!!」

「風先輩!!」

犬神の力 この大剣のサイズを変えることができるコレで!!

『点』の攻撃をひらりとかわすなら『面』の攻撃でえ!!押し潰す!!」

「いやったあく凄い風先輩!!」

「自慢の姉です」

「さあ次いくわよ!!」

「って うわあ!?この御霊何か増えてる!!」

「めんどくさいわね!!」

「ま…任せてもらっていいですか…」

この子 木霊の力 右手に付いてるリングからワイヤー的なものが出る

「数が多いなら まとめてえ…えええい!!」

よかった これで残りは本物の御霊だけ!!

「もう1回…えええい!!」

「やったあ樹ちゃん!!」

「はあう…できたあ〜」

「ナイス樹!!あと1体よ!!早く桜華の所に行くわよ!!」

「はい!!」

「風先輩…」

「何 東郷…」

「部屋では言い過ぎました ごめんなさい…これからは精一杯援護します」

「東郷…心強いわ!!私の方こそ「悪い風!!来てもらって早々悪いが手を貸してくれ!!」最後まで言わせなさい!!このバカ!!」

「いいからはや…ズバン!!」…今の誰…?」

「東郷よ…ほんとごめんなさい…」

「ふえ〜1発必中…」

「へ〜東郷かいいい援護だ……………つて!?!はあ!!アイツいつの間に変身してんだよ!!」

「ついさっき」

「もう何も言えませんか…」

「お姉ちゃん達 話してないで!!御霊が出たよ〜」

あれ話してる間に…………とりあえず終わらせますか…

「この御霊…」

「動きがはやく〜い!!」

「はやすぎるよお〜」

「くっ…待って今なんとかか…!!」

「東郷!!合わせろ!!」

「っ!! はい!!」

桜で敵を囲み動きを抑えた所に東郷の射撃で!!

「狙い打っ!!」

「桜華先輩 東郷先輩…!!」

「撃ち抜いた…!!」

「やったあ!!」

「みんな…無事でよかった…………」

やっぱお前の射撃は最高だよ……………『須美』
つと結界が解けるか

「東郷さん!!」

「友奈ちゃん!!」

「かつこよかったよ……!! 私ドキツとしちゃった!!」

「…そんな私…」

「本当に助かったわ東郷」

「風先輩……………覚悟はできました 私も勇者としてがんばります
!!」

「…………東郷ありがとう!! 一緒に国防に励もう」

風よ流石に国防は言い過ぎだろ

「……………」

ほら東郷も困って…………「国防♪」違ってたろ!? スゲー嬉しい顔してる
し……東郷 お前何かちよろい気がするなく

「そういえば友奈ちゃん課題は?」

「あツ!! 課題…明日までだった 勇者アプリの説明テキストばっ
かり読んでて…」

友奈…お前でもちゃんと説明読むんだな…

「ふふっ そこは守らないから頑張つてね」

「そんなく〜」

「勇者も勉強も両立よ」

はあ…何かいろいろ疲れたな…
まあみんな仲直りできてよかった

久々の休息

東郷が勇者になった戦闘が終わった翌日

勇者部部室

「今日は珍しいわね〜どこからも依頼無いわ」

「ほんと 珍しいですね〜」

「2人とも依頼が無いからって気緩み過ぎだよ」

「まあこの頃ずっと働いていたから偶にはいいのではないですか」

皆 見事に疲れきってるな〜まあ2日連続でバーテックスとの戦闘したからな…

「皆 お茶淹れたぞ 今日のお茶菓子は苺大福な」

「やったくちようど甘いものが欲しかったのよ〜」

「桜華先輩のお菓子だ〜!! 久しぶりだあ〜」

「久しぶりって つい3日前に持ってきただろ…」

「それでも久しぶりなのには変わりないですよ!!」

「そうですよ!! 桜華先輩のお菓子美味しいんですから!!」

「樹ちゃんまで…まあそう言って貰えるのはありがたいかな」

「あの…桜華先輩…」

「何 東郷?」

「またお菓子作り 教えてもらってもよろしいですか…?」

「ぷっ…」

「何で笑うんですか!」

「いや そんな改まって言うことで無いなと思ってな…」

「近いうち教えてあげるよ」

「もう…でもありがとうございます!!」

「ポソツ 作ったお菓子で友奈を喜ばしてあげるといいよ」

「な!?! 何言ってるんですか!! 桜華先輩 そんなこと思ってなんか!!」

「ほら桜華 東郷を弄ってないであんたも一緒にお茶にしましょ!!」

別に弄ってなんかいないんだが…でも何かやつと『過去』話できるかな…話しておかないといかないし

「はあく美味しかった」

「美味しかったです 桜華先輩」

「今度はうどん持ってきて!!」

「風先輩 流石に学校にうどんは無理かと…」

「…皆 話したいことがあるんだけど…」

「話したいこと?」

「それって?」

「何々!!桜華自ら暴露話!!」

「少し違うがある意味当たりだ…」

「?」

「初めてバーテックスと出会ったとき 俺が何の躊躇いも無しに戦闘したことだ…」

「そういえば桜華先輩まるで『知っていた』って感じがしましたね…」

「それに偶に昔の事 独り言のように言いますよね…」

「聞かれてたか…」

「まあ…この頃いろんな事が有ったから聞く暇がなかったしね…今くらいしか暇な時ないしね…」

「それは先輩の過去が関係してるんですか?」

「ああ…」

「桜華先輩の過去…」

「私も初めて聞くわね」

「普通昔の事なんて聞かれない限り話さないからな…」

「それもそうね」

「さて そろそろ話していこうか…時間も惜しいことだし」

さて 俺の過去について語っていこうか

俺の犯してしまった罪についても……

思い返す過去 『初戦闘』

俺の過去……

この勇者部が神樹様に勇者として選ばれる前……

――――

小学校に入って間もない頃の俺は勇者ではなく普通に両親と平和な生活をしていた……

だかその日常も長くは続かなかった……

『バーテックス』に両親を殺されるまでは……

俺はバーテックスを憎んだ

でも力が無い俺にはどうしようもなかった……

だが……

「君には適正がある…我々についてこないか？」

そこに現れたのが『大赦』だった

ここから俺の人生は変わった……………

適正があるとは言ったが普通の小学生にいきなり勇者にはなれない

自分が得意な武器が見つかるまで各種武器の練習

さらに大人相手の戦闘訓練

だが訓練と言うのは本気の打ち合い

一歩間違えれば命を失う訓練でもあった…

こんな事が続き…小6の春

神樹館と言う学舎に編入させられた

(勉強については大赦で学ばされた)

大赦曰く

「此所には勇者である3人がいる、その子達を守るのかお前の役目だ」

俺はあんな生活をしていただけで他人と付き合う事が出来なくなっていたため そんなことできないと思っていた…

編入から数日たっても俺の回りには誰1人もいない…

そんなある日……初めての『お役目』が訪れた……

「……とまって……いる……?」

「ねえねえ これ敵が来たんじゃないの!?!」

「! 三ノ輪さん動けるんだ」

「鷺尾さん 乃木さんも動いてるって事はやっぱり」

(この3人が勇者か……守れと言われたが関係ない……俺1人でやるだけだ!!)

そう思った俺は3人を置いてバーテックスの所に向かった

「アイツがバーテックス……両親の仇!!」

大赦からは「倒さなくていい追い返せ」か……

殲滅するだけだ……そうすればもう俺みたいな人を作らずに済む……

「はああああ!!」

「ねえねえ 2人は先に行ったあの子の事って知ってるの?」

「いんやアタシは知らない」

「確か数日前に編入してきた子ね」

「アイツもこの中で動けるって事はアタシ達と同じだよな?」

「そうね私達のお役目は大橋を守ること」

ドオン!!ドオン!!!

「! この音もう戦ってる!!」

「急ごう流石に1人じゃ無理だよ」

「それじゃ」

私達は大赦から渡された携帯の勇者システムを起動させた

「いこう 大橋へ!!」

「こんの!! しぶといんだよお前は!!」

戦闘開始してから何回も斬ってるのに直ぐに再生しやがる…本当に倒せないのかよ…違うな
「お前が倒れるまで斬るまでだ!!」

思い返す過去 『連携』

私達は変身して大橋に向かっていている最中

「う〜ん〜ん…」

「どうしたの乃木さん？」

「先に行ったあの子の事…大赦から何も聞いてないな〜って思っ
て…」

「そう言えばそうね…」

「アタシも聞いてないな〜」

おかしい…私と三ノ輪さんならともかく乃木さんは大赦の中でも
力がある家元なのに聞いてないなんて…

何か理由でもあるのかしら…

「見えたよ2人とも!!」

「あれが…向こう側から来た敵」

敵の行動形式は教わっている

① 人を襲う

② 人以外は襲わない

③ 通常兵器はほぼ効果なし

そして敵の目標は神樹の破壊

神樹はこの世界全ての恵み

神樹を破壊されれば人類は滅亡する

「え〜と…名前…まあいいや!!援護するよ編入生!!」

「大赦の奴等…本当に恨むぜ 何が「この力ならバーテックスを倒せ
る」だ…まったく倒せる気配見れないんだが」

斬っても斬ってもキリが無さすぎる…そろつとスタミナがヤバイ
な…追い返すしかないのかよ…

それに何なんだよ大赦が言ってた俺に足りないモノって!!

俺は1人でバーテックスを殲滅するって決めたのに

もう誰かを失うのは嫌だから

「てやあああああ!!」

後ろから何か突っ込んで来たと思ったら敵に結構切りつけやがった…アイツの武器は斧か？しかも2刀か…

「わあ凄いやミノさん!!」

「ミノさんって…やめてよ!! それよりコイツ以外とモロいよいける!!」

アイツ後ろから敵が近づいてきている事に気づいてない!!

「三ノ輪さん後ろ!!」

「後ろ…?」

「退いてろ…」

俺は全力で敵に飛び蹴りした

「あっ…ありがと」

「敵が弱いつていつても油断するな…」

「わかったよ!!」

コイツ本当に分かってんのかよ…

「大丈夫!？」

「大丈夫 大丈夫!!編入生が助けてくれたから」

「そうなの…ありがと」

「礼はいらない…俺はアイツを倒せばそれでいい…」

「ねえ君？」

「何だ？」

「名前教えてくれない 忘れちゃったから」

「の…乃木さん!!こんな時に何聞ってるのよ!!」

「わははは!!乃木さん最高!!」

この3人…戦いつてもものを分かってるのか…

「この戦いが終わったらな…今は戦闘中だ」

「だくめ!!今教えてく!!」

「何でだ…?」

「一緒に戦う仲間だから!! (ドヤ顔)」

「…」

仲間か…そんなもの…失うだけだ…

「そんなも「だめえ…かな?」…」

俺はこの3人と同じ年齢だが少し身長は高い方だ…すなわち 上
目遣い十涙目

誰かこの必殺コンボ破れる覇者はいないのか……

「私からもお願い」

「アタシからも!!同じ接近戦仲間として!!」

はあ……ここまで言われたら仕方ないか…

「黒崎 桜華だ…それと…」

「二?」

「君達の名前教えてくれ」

「素直じゃないなく♪ アタシは『三ノ輪 銀』だ!!よろしくな黒崎さん!!」

「改めて『鷲尾 須美』よ、よろしくね黒崎さん」

「『乃木 園子』だよ〜ねえねえ黒君って呼んでいい?私もノギーとか
でいいよ〜」

「呼び方は人それぞれだから何でもいい…」

仲間なんて…

「よし!!さつきとアイツ追っ払って終わらせようか!!」

俺には…

「そうね」

必要無い

「私も頑張っちゃうよ〜」

けど…何でだ…この3人といると何でもできる気がする…

「三ノ輪…さつきみたいに斬った後でも油断するなよ」

「わかってるって!!」

大赦…

「乃木…君は敵の攻撃を君の『力』で抑えてサポート頼む」

「わかったよ〜」

これが

「鷲尾…君は中距離から射撃頼む…狙いはアイツの頭の先だ」

「わかったわ」

俺に足りないモノ…『仲間』か

……悪くないかもな……

「いぐぞー!」

それからは戦いがすぐに終わった……

結論から言えばバーテックスは倒せず追い返す形になったが大赦からはそれでいいらしい……

それにしても……

「本当に君男の子なの!？」

「見た目完全に女子にしか見えないな」

「ねえねえ今度一緒にお買い物行こうよ」

何で今俺の見た目の話になってんだ……

そして乃木……お前単に女服装してみただけだろ……

「何度も言ってるだろ俺は男だ」

「でも『お役目』って女の子しかできないんじゃない？」

「大赦曰く俺は『特殊』だそうだ……詳しくは解ってない」

「なるほどな」

「まあ俺が何だろうが関係ない……バーテックスを倒せばそれでいい」

「倒すって私達は追い返すのがお役目で……」

「確かになく今日の奴だって何回攻撃しても直ぐに回復されたしな」

「追い返すしかないもんね」

追い返すしかないか……大赦は何か隠しているのか……

でもこの3人と一緒だったら何とかなるか……

それはあの日が来るまでの短い間でしかなかった…

思い返す過去 『日常』

あれから数日…

「なあ三ノ輪…」

「どうしたん？」

今日はもう学校終わり普段なら戦闘訓練してるはずなんだが

三ノ輪から無理やり連れてこられたのだから…

「何で『イネス』なんだ…」

「『イネス』!!それは砂漠に現れる強大なオアシス…!! 皆 今日はいネスマニアのアタシが完璧にエスコートしてあげるからね!!」

「あはは…」

「何言っても聞かないな…」

「さーてまずはどこから行こうかねえ」

自分でエスコートするとか言つといてノープランかよ…

「うー…」

「ありや乃木さんどうしたの？」

「制服のまま買い食いなんてほとんどした事ないから落ち着かなくて
〜」

「大丈夫よそのつち 神樹館では4年生を越えれば買い物も許可されている 節度ある行動を心がけていれば下校中でもいいと聞いているわ」

本当に鷺尾は真面目だな…それと乃木と仲良くなってるな

「鷺尾さんの言う通り!!10歳にもなったらお金の使い方も知つとかない!!」

「う…うん!!そうだよね!!」

「そうと決まれば行き先決定〜!!」

「どこ行くの?」

「ふっふっふ よくぞ聞いてくれました!! それはこのイネスマニア
イチオシのお店だよ!!」

「~~~~っ おいし~~~~っ!!」

「どう?どう? ここのゼラートめつき美味しいでしょ!!」

「最高!!最高だよミノさん クレープもいいけどゼラートもこんな
にいいものだったんだね」

「てかなーんで少し泣いちゃってるの乃木さんてば?」

「クレープ以上に美味しいおやつはないと思ってたから嬉し泣きだよ
」

「ダチとかと来たときに食べたりしなかった?」

「私 あまり友達いないから~~~~あつでもこの前わっしーと一緒に来
たよ!! ねくわっしー」

乃木:ゼラートよりグレープの方があまり食べる機会が無いと
思うんだが:でその鷺尾は:

「じーーーーーっ……」

何ゼラートをガン見してるんだ:

「鷺尾さんはなんでゼラートにガンつけて固まってるんだらうね
?」

「わっしーにはゼラート合わなかった?」

「合わないどころか:宇治金時味のゼラートがとても美味しくて:
私はおやつは和菓子かせいぜいところてん派だったから:それがこ
の味:わずかに揺らいだ私の信念が情けなくて:」

「なんだかわっしーが難しいことを言ってる」

「というか鷺尾:お前はどんな生活をしている:今時の小学生がと
ころてんをおやつに食べてるのはあり得ないぞ:

「ま:まあウマかったらそれでいーじゃんね?」

「そうだよくはふう:メロン味大正解:」

「そ:そうね確かに考え方の固さは実戦で命取りになるかもしれな
い:素直に美味しく食べるわ:うん ほろ苦抹茶とあんこの甘さの調
和が絶妙だわ:うん:」

その感想は小学生が言えるレベルではないぞ:

「わははっ:なんだか鷺尾さんって面白っ!!」

「ねくもうちよつと怖い人かと思ってた」

「黒崎さんはどう思う鷺尾さんのこと？」

「急に人に振つてくるなよ……まあ言動が小学生とは思えないが友達思いでいいんじゃないか？」

「えっ!?ちよっ!!私そんな感じに見られてたの!？」

「鷺尾さん顔真つ赤く!!」

「ううう黒崎さんがそんなこと言うから……」

「ねえわっしー……」

「何そのつち？」

「わっしーの宇治金時味も美味しそう……」

「一口もらえばいいーじゃん 鷺尾さんめぐんであげなよ♪」

「いいの〜?」

「ええ、いいわよ」

「え ええと〜こういうの初めてで緊張するところもあるけど、あこがれでもあるので……お言葉に甘えていただきますっ……」

「……」

(それは礼儀作法に反するのでは……でも断つてチームワークを悪くしたくないし……仕方ない)

「……はい」

「!! ん〜美味しい〜!! じゃあじゃあ今度は私のも食べてみてわっしー!!」

「!？」

「わっしー あーんだよあーん」

(はしたなくないだろうか…… ってそのつち!!何その笑顔やめて!!断りづらい!!)

「……」／／ あ……あーん……メロン味も美味しい……」

「だよね だよね〜」

「2人とも初々しいな!!ガチの恋人か!!」

「煽るな三ノ輪……2人が恥ずかしがってるぞ」

「ミノさん!!そんなこと言わないでよ 恥ずかしいよ〜」

「銀!!」

「あはは♪ごめんごめん、でも確かに宇治金時もメロンも超素敵な味

だよ」

話題変えやがったな…三ノ輪め

「でもねお2人さん 最強はアタシが食べてるコレ!! しょうゆ味のジェラート!!」

なんだ俺が頼んだやつと同じもの食べてたのか…最強って言える味ではないが…

「コレはガチでナンバー1!! さあさあお試しあれ!!」

「それじゃ〜一口〜」

「いただくわ」

さて…乃木と鷺尾がどういう反応をするかな…

「どうどう?ピツカーンときた?」

「うう〜なんだか難しい味だね〜」

「…あれ?」

「いい味だけど大人向けかもしれないわね」

「あんれえ?」

やっぱりそういう反応してきたか…にしても鷺尾お前の感想は相変わらずバツサリと言うな

「そういえば黒君は何頼んだの〜?」

「そうだよ一人で無言で食べてて!!」

「まて三ノ輪…俺が虚しい人みたいになるからその言い方はやめろ」

「そうよ銀…黒崎君だって何か考えていたのかもしれないわ」

「はあ…別に俺はしょうゆ味のジェラートを食べてただけだ」

「あの味を普通に食べてる猛者がいた!?」

「ちよつ?!お2人さん しょうゆ味はこれでもオススメ品なんだよー

!!」

「…なっなんだって〜!!」

「話が進まん…俺は別に甘いものが苦手だからコレにしたただけだ」

鷺尾と乃木…本当に仲良くなったな…

「なんだ〜そういう事だったのか〜なんか誤解したよ〜」

「早とちりしてごめんなさい」

「別に気にしてないからいいよ…それより三ノ輪が…」

「……………なんか…サーセンっした…」

「うう…まさか　しょうゆ味がここまで厳しい現実を迎えているとは…」

「はあ…三ノ輪その話はもういいから次はどうするんだ…」

「そんなにあのしょうゆ味を気に入っていたんだな…なんか悪いことしたな」

「お金の使い方もわかったことだし　次はお金を使わないアタシのイチオシスポーツだよ!!」

「エレベーター?　上の階にまだ何かあったか?」

「ミノさん本当にイネスに詳しいんだね」

「モチロン!!　なにせイネスマニアですから!!　なんならイネスマスタ―って呼んでもいいのだよ?」

「呼ばない(わ)」

「速答!?　ヒドイヨ…って到着ー!!」

「屋上?」

「ほらみんな早くーこっちこっちー!!」

「待つてよミノさーくん」

「そのつち走ると危ないわよ」

「まったく…元気な奴等だ…」

「三ノ輪が待つてる場所まで行くとそこから俺達が住んでる町全体を見渡せるいい景色が広がっていた」

「わあっ」

「凄い景色く」

「これは驚いたな…こんなに景色がいいなんて」

「にひひ…こんなに驚いてくれたなら連れてきた甲斐があったな♪」

「あの辺が私の家で　あそこが神樹館」

「遠くに見えるのが『壁』であれがー」

「俺達が戦った場所…『大橋』」

「またあそこで戦うんだろうね」

「ぶっ壊されないように注意しないと」

「そういえば私達が着くまで1人で戦っていたけど体は大丈夫なの黒崎君?」

「検査してもらってどこにも異常なしだ、なんだ心配してたのか?」

「そ、それは同じお役目をするものとして…」

「わっしー顔真っ赤く♪」

「今日何回顔赤くしたら気がすむんだよ♪」

「ちっ!?違うのくく!!」

「で?みんなどうだったこの町最大の娯楽施設を満喫した?」

「最大の娯楽施設っていうか此所しかないじゃない」

「鷺尾さん:それ言ったらおしめーよ:」

「そんなことよりミノさんと黒崎さんも『鷺尾さん』じゃなくて『わっしー』でいいのに」

「そのつちが許可を出す事でもないと思うわ:」

「えー わっしーはわっしーだよね」

「……」

「ん?」

「:ちゆうかお2人さんいつの間にか仲良くなりすぎでしょ

!!」

「気づくの遅くないか:」

「いつなの?アタシがない時にそんなに仲良くなってたの!」

「私は元からもっとお話ししたかったよ」

「敵が来てしまったの だからチームワークを深めていかないと」

「ぬぬ:つまり:その: 何が言いたいかと言うとね!!」

「アタシとも仲良くなるうよ!!」

「!!」

「『乃木さん』改め『園子』!!」

「『ミノさん:』」

「『鷺尾さん』改め『須美』!!」

「ぎ:銀」

「『黒崎さん』改め『桜華』!!」

「俺もかよ:」

「そうだよ!!みんな同じ椅子で食事もしたし もうアタシたちダチ

「コーっつゝんたわ…」

シクヨロ!! マイフレンド!!

「よろしく〜ミノさん!!」

「よろしく 銀」

「『ジュー』」

「なんだ…その目は？」

「『私（アタシ）達の事名前で呼んで!!今!!』」

「仲良くなつていきなりシンクロするとか凄いな…」

「ミノさんが仲良くなつたから黒君も仲良くなる〜」

「そうよ 黒…桜華も一緒に」

「あー!!須美が名前で呼んだー!! ほーらー桜華もちゃんと『名前』
で返してあげないと♪」

「はあ…わかったよ…改めてよろしくな『須美』『銀』『園子』」

「『……………っ／／』」

「どうした？」

「いや…その…」

「男の子に名前で呼ばれたことがあまりないから〜」

「なんか…はずい」

「……………やっぱ呼ぶのやめようか？」

「『いや!!名前で呼んで!!』」

「……………わかった」

思い返す過去 『合宿』

神樹館 資料室

「う……ぐぬぬ……」

イネスで銀からの友達宣言から早数週間

バーテックスとの戦闘もあった

そして今は……

「わからん!! 勉強より先にイネスに行きたいです鷺尾先生!!」

「ダメよ銀 訓練があるのだからやれる時に勉強しておかないと」

「須美ってば取り付く島もないっしょ」

小テストが帰ってきてきて銀の点数が少し酷かったので勉強会になっている……

俺か? あんな問題簡単すぎて満点とってやったよ。今は少しでもバーテックスに関する資料を探しているのだが流石に一般人が知らないことだからあるわけないか………寝よ……風も気持ちいいし

「寝てる園子は放置でいいんすか?」

「そのっちは頭いいのよ……そうは見えないけど」

「桜華は?」

「今回の小テストで満点らしいわよ……この私が負けるなんて……」

「おのれ天才集団め……耳元で虫の名前囁いてナイトメアを見せてくれようか」

「………よくそんな鬼のような想像ができるわね……自分がされたらどう思うの?」

「アタシはGとか大丈夫だもん!! 須美はどう? Gとか平気?」

「どうしてウイルスで絶滅してくれなかったのか恨むばかりね」

「お、苦手なんだ? やだ……鷺尾さんカワイー」

「は……話を荆らそうとしてもダメよ銀」

「そういえば園子はここで寝てるけど、桜華遅いね何してんだろ?」

「何か資料を探すとか言っていたわ……さあ銀歴史の勉強に戻りましょう」

「う……ツラ……」

「では四国を囲うこの壁はどうして存在するのかしら?」

「華麗にスルーされた…でもそんな位はわかるさ♪神樹様が四国にいる人間を結界で守ってくださっているんだ」

「外の世界には死のウイルスが蔓延している 神樹様は人類にとってなくてはならない存在なの…で、ここから先は教科書には載っていないことだけど…ウイルスの海から生まれた存在が

『バー

テックス』

神樹様を破壊せんと外の世界からやってくる人類の天敵

通常の兵器は効かない為神樹様とお話して神の力を分けていただいた…これが私達が使う『勇者システム』

の誕生になるわ」

「いやその辺はわかっているんだから他の教えてくれよ」

「ならよかったわ…小テストで52点なんてとってたからここすら心配で…」

「園子は0点だったぞ!」

「あれは記入ミスしてただけで回答は満点だったわよ」

「……………ミノさん大好き♪」

「え?いきなりなに!」

「……………Zzzz」

「…なんだ寝言か…大好きとか言われると照れちゃうな…どんな夢みてるんだろ?」

「……………!! 私は!?ねえそのうち私は!」

「す…須美さん!?!揺らすなよ気持ちよく寝てるだろう」

「……………おにいちゃ〜ん♪」

「……………なあ須美さんや」

「……………そのうちお兄さんいたのかな?」

~~~~~♪~~~~~

「あれ?電話だ」

「珍しいわ大赦側からなんて…ちよっと出てくるわ念のためそのうち起こすのと桜華を探してきて」

「りよ〜〜かい♪……………さて園子〜起きろ〜」

「うう〜〜ん、なあ〜〜に〜?」

「大赦側からの電話があつて念のために起こしたんだよ!!桜華を探しに行くぞ園子!!」

「まだ眠いけど…がんばる〜」

「はい…わかりました、今から向かいます。すいません助かります、ではまた後程…失礼します」

何だろ?全員で集まるなんて…しかも今からなんて?

まあ今考えても仕方ないわ

「銀?他の2人は?」

「お、須美電話終わった?来てみスゴいもの見れるぜ♪」

「スゴいもの?」

「はふう〜癒される〜♪」

「……………」

「な、スゴいだろ」

そこで私が見たものは窓際で椅子に座って寝ている桜華の寝顔なのだが…

「銀…………」

「何?」

「桜華って本当に男なの!?!」

その寝顔がどう見ても女の子にしか見えない…

「ううん…あれ?どうした何かあつたのか?」

「あくもう少し見てたかつたのに〜」

「何がだ?」

「それはもちろん桜華のねが…「そうだわ!!みんな今すぐ外に出るわよ!!」…はい?」

「本当に何かあつたのか…………」

「今から迎えが来るからそれに乗ってほしいそうよ」

「迎えてどこからなの〜?」

「大赦よ」

大赦の迎えの車内

「ー」ということが資料室で起こったわけだよ」

「わく見たかったな〜その時のわっしーの顔〜」

「そのつち…」

「大丈夫、わっしーの事も大好きだよ♪」

「ありがと…」

「あなたたちいつの間にかすっかり仲良しね」

こう言ってくるのは神樹館の養護の先生兼俺達勇者の担当者

「大赦も全面的にあなた達のバックアップを始めるそうよ、その一環として大赦が運営する旅館で合宿してもらいます」

「合宿…てことはお泊まり会だ!!やったく〜♪」

「効果的に鍛えられますね 助かります」

「そりや楽しみだ♪いよいよ夏だし!!」

「合宿か…悪くない」

(…いいチームだわ)「あと一応便宜的に隊長を決めておかなかちやいけないの。そこでお願いしたいのが…乃木園子さん貴方にお願いたいの」

「えっ…わ、私ですか? 隊長なら私じゃなくてわっしーや黒君の方が向いてると思うのに…」

…おそらく園子…いや乃木家が大赦において絶大な権力を持っている…その事を考慮しての人選か

「アタシじゃなければどっちでもいいよ」

「…わっしー?」

「…ううん、私も賛成よ」

「黒君は?」

「俺は3人を守るように言われているから園子の隊長に賛成するしかない…それよりも合宿頑張るぞ!!」

「…おー!!」

ランニング

「ふえ〜みんな速いよ〜」

「頑張つてそのうち」

「わはは〜おいてくぞ〜♪」

「ほら、もう少しで着くから頑張れ」

「うう〜…」

室内トレーニング

「ぐぬぬ…意外にムズいなバランスボールつて」

「ほら園子あと5回」

「もう頭が上がらないよ〜」

「そのうち…腹筋弱すぎるわよ…」

徒手訓練

「は!!」

「せい!!」

「ふっ!!」

「もう腕が動かないよ〜…」

「二園子（そのうち）…が隊長で本当によかったのか…」

カポーーーーー……

「ふう…こんなに訓練したのは神樹館に入る前以来だな」

今日の訓練が終わったのでお風呂に入っているのだが

「流石旅館と言うだけあるな…露天温泉でも広すぎるだろ」

大赦が運営してる旅館か…室内運動場に外の敷地も大きかったし

金持ってるな〜…つてこんなこと言っても仕方ない……

《うわ〜温泉ひつろ〜い♪》

《まるでプールだ!!》

《そう言っても泳がないでよ銀…》

「みんなも来たか…」

《あ〜〜激しい運動の後の温泉!! 癒されますな》

《ミノさん何かおじいさんみたい〜》

《勇者というか体育会系の合宿と全く同じだわコレ…必殺技をバーン

!!と授ける様なイベントないのかね?》

《基礎はとにかく重要だから仕方ないわ》

《やれやれ成長する女の子にはイロんな意味で厳しいメニューだ…》

《銀 文句が多いわよ》

《そりや既に色々成長している人は余裕あるでしょーよ》

《成長…？》

《その胸 クラスで1番大きいんじゃない？》

《銀!!》

《事実を言ったまでだね!!むしろ大きいのに照れるとか贅沢言うなー!!》

《もく温泉にはゆっくり入れればいいのにな》

………あいつらはなにしてんだよ…園子は落ち着いてないで須

美と銀を止めてくれ…

《あれ…？ねえ2人ともあれ何だと思う…？》

《あれ…？》

《あれは…洞窟？》

《行ってみようよ》

《そうだな♪おもしろそ》

《ちよつと2人とも…》

……洞窟とかあったかこの温泉…？

「わあくこつちも温泉だ〜♪」

「こつちも景色いいな〜」

「そうね…あれ？誰かいる……っ!？」

さて、ここで問題だ…どうやら洞窟というのは温泉同士を繋ぐものだったらしい…後から聞いたが普段は塞いでいるらしいが…今回は大赦が仕込んだのか知らないが開放していたらしい…

そして3人の格好が

須美はきちんとタオルで体を巻いているが…先程の会話を聞いたせいで目線がアレに行ってしまう…本当に小6の体つきじゃないな…

園子はタオルを巻いてなく胸の前に置いているだけなのでチラリズムが発生している…

1番問題なのは銀…タオルを肩に担いでいるので何1つ隠してない…

俺は一瞬で顔を3人から180度剃らしたが…お約束なのか…

「「きやああああああ!!」」

こうなるわけだ

「な!!何でここに桜華がいるの!?!」

「こっちは男湯だからな」

「てことは!?!混浴なのかここの温泉は!?!」

「まあそういうことだな…」

「黒君見ないでく…」

「見てないよ…」

「「……………」」

「悪い…俺上がるわ…それとコレは記憶から消しとくからゆつくり温泉入っててくれ…」

「待って〜」

「何だ園子?」

「黒君も一緒にお話しよくよく♪」

「……………銀…須美…この子は何を言ってるらっしやるのかね?」

いくらなんでも今こんなことが起きてるのに話したいとた…この子は恥じらいということを知らんのか…

「そ…そのっち…流石にこの格好じゃ…」

「恥ずかしすぎて話すどころじゃないんだが…」

「大丈夫だよ〜」

「「大丈夫じゃない!!」」

「はあ…話は部屋でしてあげるよ…今は…流石に俺も無理…」

「ええ〜……………わかった〜後でお部屋でお話しよくね〜♪」

「ああ」

俺はそう言いつつ温泉を出た…

「驚いた…まさかあの洞窟が繋がってるとはな…にしても…銀の体いつも男っぽい服着てるせいかわからなかったが…須美より小さかったがそれなりにあるんだな……………っ／＼な…何を言ってるんだ俺は〜

!？」

ヤバイ…いくらなんでもコレはヤバイ…どうい顔してアイツに会えばいいかわからない!!

あの後…夕食が出されたのだが温泉での出来事が忘れられず、もはや味など覚えていない…銀と須美も俺から顔を剃らしていたが…園子は

「これおいし〜♪」

等と言つてさっきのことを気にしてる気配が見えなかった…

〜〜男子寝室〜〜 (桜華1人だけのボツチ部屋)

(流石に同じ部屋つてことはないからな!!あつたとしてもあんなことがあつたのに同じ部屋で寝れるか!!)

「はあ…疲れた温泉に入って疲れるとか何なんだよ…明日も速いしもう寝よ」

〜〜女性陣寝室〜〜

「さて、就寝時間になりましたが、お前ら寝られると思うなよ!!」

「明日も早いだよ、もう寝ないと…」

「いやだ!!」

「……………」

「い…いや違うんだ須美!!コイバナ!!恋話をしよう!!」

「またそんな…」

「……で、そういう銀は好きな人いるの?」

「どきどき…」

「う〜んと内緒♪」

「ミノさんそれだといるみたいだに聞こえるよ〜♪」

「はたしてどっちでしよ〜かな〜♪」

「何?もしかして銀は桜華の事でも気になってるの?」

「なっ!?別にアタシは桜華のことなんか!!」

「ミノさん、黒君と仲良いもんね♪」

「だからってそこまで言うことないだろっ!!」

「ニヤニヤ♪」

「笑うなっ!!そういう須美や園子はどうなんだ!？」

「私はいないわ、そのっちは？」

「ふふふ…私はちゃんというよ」

「だ…誰？」

「クラスの人!？」

「うん!!それはねっ『わっしー』と『ミノさん』!!」

「はあ…」

「そうだと思っただわ…」

「なんでわかったのっ？」

「てか園子、桜華はどうなんだ？」

「えっとう黒君はねっ何かお兄ちゃん的存在かな♪」

「そういえば…そのっち寝言で『お兄ちゃん』って言っただわね?あれも…」

「え!?言っただの!?黒君に聞かれてた!？」

「いんや…桜華も別の場所で寝てたから聞いてはないぞ」

「よかつたっ」

「でも聞いているとそのっちも桜華の事が好きなのね♪」

「うっわっしーっ」

「ごめんごめん♪」

合宿が終わりいつもの楽しい日々が過ぎて『あの日』がやってきた  
…俺がみんなを守ることができなかつた…『罪の日』が…

## 思い返す過去 『罪』

あれは『大橋』でお役目をしていた時に起こった…

「よっしゃ♪追い返した!!」

「これで今日のお役目は終わりね」

「つかれたよ」

「……………」

何だ…この胸騒ぎは…

「どしたの桜華？」

「様子がおかしい…」

「……別におかしくないと思うけど？」

「そうだけ桜華!!ほら神樹様の結界がとけ……てない!？」

「そんな……」

「なんで〜?」

結界が消えないって事はバーテックスがやってくる!!

「それはまだお役目は終わってないって事だ!!」

「なっ…2体連続して来るのかよ!？」

「そんな……」

「え〜なんで〜!？」

「大丈夫だ!! 相手は1体同時…落ち着いて対処するぞ!!」

「了解!!「わかった〜」」

……………

「コイツでどうだー!!」

銀の一撃で2体目のバーテックスは『壁の向こう側』去っていった

「ふう…これでもう終わりだろ…疲れたー!!」

「お疲れ様 皆は大丈夫?」

「ああ…大丈夫だ」

「もう動けないよ」

「さっさと戻ろうぜ♪イネスのジエラート食べたい!!」

「その前にお役目が終わったら検査があるんだから」

「私もジエラート食べた〜い♪」

「……………」

「どうしたんだ桜華? 早く帰ろうぜ」

「……………なんでだ2体目も追い返したのに胸騒ぎが消えない

「っ!? 皆下がって!!」

『壁の向こう側』からまたバーテックスだと……………

「もういや〜!!」

「しつこいんだよ!! 何体いやがんだ!!」

「そんな…これじゃ無限に出てくるの!?!」

「まずい…皆は連戦で体力が無くなってる……………このままじゃ

「銀…2人を連れて大赦まで逃げてくれ…ここは俺がやる!!」

「なっ!? そんなのできるわけないだろ!! 桜華が……………」

「俺なら大丈夫だ…早く!!」

「とは言え既に俺もギリギリもいいところだ…どこまで持つか…

「……………桜華 ごめん!!」

「そうやって銀は俺の鳩尾に強烈な一撃をかました

「なっ…銀……………どうして」

「そういうのは桜華よりタフなアタシがやる役目だ!!」

「…ぎ……………」

「俺はそこで意識を失ってしまった

「う…うんっ…」

「桜花!?目を覚ましたの!!」

「黒君起きてっ!!」

「はっ!!ここは!?銀は!」

「桜華落ち着いて」

「落ち着いてられるか!!銀は1人で戦ってるのに……」

俺は決めたんだ…何があってもこの子達を守るって………銀…  
待ってる!!

「銀!!無事か!!」

「銀!!」

「ミノさっくん!!」

周りにはバーテックスがいない…マジで1人でやったのか!?

「銀!!起きてよ!!銀!!」

「どうした!」

「それが…ミノさん動かないの………」

「なっ!?嘘だろ!!」

まさか…いやそんなはずはない!!

ズツ…

「須美、園子…銀を連れて大赦に行ってくれ」

「それなら桜華も…」

「そいつは出来なさそうだ…」

「っ!?まさか」

「アイツらは俺が抑える早く!!」

「黒君…必ず帰ってきてね…」

「ああ…また皆でイネスに行こう…」

「行くわよ!!そのうち!! 桜華…」

「行ってくれ2人とも!!」

行っただか…さてと

「悪いが…ここは通行止めだ…行かせるわけにはいかねえ!!」

これが俺に力がなく銀を、皆を守ることができなかつた『罪』

## 思い返す過去 『終わり』

「あれ…ここはどこだ？」

『ここはお主の夢の中だ』

「っ!!誰だ!?!」

夢の中だと…それに俺は須美と園子を逃がして、戦って、意識を失ったはず…

『我は神樹』

「神樹!?!なんで!?!」

『お主は本来勇者にはなれるはずなかった…』

「それは大赦から聞いている『特殊』だそうだな」

『それは我の中のコやつがお主を勇者として選んだからだ』

「選んだ? しかも神樹自らではない?」

『見せた方が早いな…』

神樹は自らの樹の中から1体の小さな人形を出した

「これは…?」

「♪」

「なっ!?!おい」

なんだこれ…いきなり現れて頭の上に乗るとか…

『そやつは『桜』お主の精霊だ…』

「精霊?」

『お主達に力を与える者達のことだ』

「お主達…?…?…それって俺の他に3人にも与えられたのか?」

『3人…いや2人にだか…どうした?』

「そうか…」

てことはやつぱり銀は…

『お主はあの戦いで身体はボロボロ…目が覚めたとしてもしばらくは動けんぞ』

「じゃあ何で今『桜』渡した?」

『数年後、また戦いが始まるそれまで『桜』の力を把握しておけ』

「また…戦いが始まる…ちよつとまで須美と園子はどうした!!アイツ

らにはそれを言ったのか!？」

『その2人はもう戦えん…』

「それはどういう意味だ」

『力を使いすぎた』

「それは何か反動があるのか?」

『普通に使えば支障はないが『満開』使ったなら別だ』

『『満開』?』

『勇者と我の力を直結して絶大な力を使用する代わりに身体の一部を  
我に捧げなければならぬ…』

「なぜそんなことをする」

「あの者達から聞いているだろう」

『神に見初められるのは無垢な少女』

『そう…それは『供物』としてみられている』

『その『供物』は皆に返すことは出来るのか』

『無理だな』

「そうか…わかった、次の戦いはお前の中の常識全部ひっくり返して  
やるから大人しく見てろ!!」

『ほう…いいだろうお主の力見せてもらおう』

「……………ここは、病院か」

本当に俺の夢の中だったのか…携帯…本当ならこの中に…

♪」

「桜…これからよろしくな」

♪~~~~」

桜…お前が俺を勇者に選んだか…

「おや目が覚めていたか」

大赦の人間…

「俺はどれだけ寝ていた?」

「1ヶ月」

「なっ!? その間須美と園子はどうなった!?無事なのか?」

「乃木様は安全な所いる…鷲尾家はなくなっただけ…」

「なんだと…だったら須美はどこに行ったのか教えて…」

「あの子はもう鷺尾としての記憶が無い会うだけ無駄だ、それにどこに行ったのかは知らないしな」

「そうか…なら園子に会わせろ」

「乃木様に容易く会わせる訳にはいかない」

「どうということだ…」

「あの方はもはや神に近い存在、簡単には行かない…」

神に近い存在？ 『満開』の反動で『供物』を大量に与えたからなのか…

「お前にも上から命令が下っている」

「命令…」

「讃州中学に通い始めるとな、ちなみにもう用意はできている…」

「俺はまだ小6だぞ中学なんて行けるわけ無いだろ」

「その点に関しては問題ない」

「お得意の情報操作か」

「何でも言うがいい…」

「はあ…で、いつからだ」

「なんだ？素直に受けとめたじゃないか」

「反論するのに疲れるだけだ」

---

### 讃州中学勇者部

「これがおれの過去、それと『友達を守れなかった』という『罪』だ

## 讃州中学勇者部

俺は自分の過去を皆に話し終わった

「桜華先輩が前代の勇者…」

「前代の勇者には精霊はいなかった…」

「精霊がいなかったから傷も全て本人が受ける…」

「それで1人無くなっている…」

「やっぱりほんの2、3日前に勇者になったばかりの子達にはきつい  
か…」

「ごめんな…いきなり話して」

「ねえ桜華…」

「どうした風？ムグツ!?」

風がいきなり抱きついてきた!?何で!?

「ごめん!!アタシ何も知らないまま桜華をまた戦いに…勇者部に誘っ  
て!!」

「……………」

「両親と友達を殺されてそれを1人でずっと抱え込んで…」

「……こんなこと君達に言えるわけなかっただろ」

「そんなことをないです!!」

後ろから樹ちゃんも抱きついてきた…まったくこの姉妹は…

「ごめん…本来は最初のバーテックスも俺1人で倒して皆には戦って  
ほしくはなかったんだ…」

「先輩は優しすぎです!!もっと私達を頼ってください!!これでも私は  
武術習ってたんですよ!!」

「友奈…」

「そうです!!私だってお姉ちゃんの妹なんですよ!!少し位の無茶は承  
知のうえです」

「樹ちゃん…」

「桜華先輩はいつも私達を助けてもらってます、だから偶には後輩を  
信じてください」

「須……東郷…」

「勇者部5ヶ条『悩んだら相談』!!これからはちゃんとアタシ達に相談  
することいいわね!!」

「風…」

「そうですね!!もーつ5ヶ条『成せば大抵なんとななる』私達はそう簡  
単には負けませんよ!!バーテックスなんか1発ですよ!!」

「頼もしいな…皆…」

「誰が集めたと思ってるのよ♪」

「そうだな…」

「ごほんっ!ではこの話はこれで終わりとして先輩方それと樹ちゃん  
はそろそろ離れてください」

「「え…うわー!!」」

3人揃って一斉に距離をとった

「えーと…ごめんね桜華話し聞いてたら何かこうしたくなくなったとい  
うか…」

「すいません!!すいません!!すいません!!」

(勢いで先輩に抱きついちゃったくくく／＼)

「いや…俺も悪かったすぐに離れなくて…」

「まったく…もう仲が良いのはいいですが…」

「もしかして東郷さんも先輩に抱きつきたかったの?」

「何言ってるの友奈ちゃん私は別に公共の場で如何わしいことしてる  
先輩方と樹ちゃんに説教を…」

ははっ♪記憶が無いのに変わらないな♪

「悪いな流石に抱きつくのは無理だからこれで我慢してくれ♪」

俺は東郷の頭を撫でた

「まったく…これだから先輩は男の人からも勘違いされるんですよ／＼

「それは嫌みか東郷…」

「それ以外に何か♪」

「今度の戦闘後ろから切ってやろうか…」

「先輩は蜂の巣が所望ですか…」

コイツ…本当に記憶失ってるのか?言ってることが『須美』と変わ

らないぞ

「喧嘩はダメですくすく!! 2人とも落ち着いてください!!」

樹ちゃんが仲裁に入ってきた…

「大丈夫だ「よ」冗談だから」

「両方本気にしか見えない目してますが!？」

なんだろ話したらスッキリした

「ぷっ♪はははは♪」

「急にどうしたんですか笑って?」

「話したら何か気持ち軽くなった♪」

「スッキリしたようね♪」

「ああ♪ありがとう皆♪」

俺は心からの感謝の意を笑顔で返したのだが…

「「「っ／／／／／／／／／／」」」

「顔赤くしてどうした? 熱でもあるのか?」

「あー／／」

「これはー／／」

「そのーですなー／／」

「なるほど、これは男性でも陥落してしまうわけですね／／」

皆顔を後ろに向けて何してるんだ? 心なしか室内気温上がってる

気もするし

……園子、こっちは新しい仲間と元気にやってるよ…須美は記憶が失ってるけど必ず取り戻してお前に会わせてやるからな…

銀…俺と須美、新しい勇者を見守っていてくれ

## 海での出会い

晴天の空…海猫の鳴き声…そして…

「よっしゃ!!今日は大漁じゃい!!悪いな兄ちゃん手伝ってもらって!!」

テンションの高い漁師のおじさん

「勇者部に依頼があればこなすのが讃州中学の勇者部ですから」

俺は勇者部に依頼が来た「漁の手伝い」をしている…

なぜこうなっているかというと…

く勇者部 部室く

「風先輩依頼が2つ入ってます」

東郷がいつも通りPCで勇者部のブログの依頼板を見たから時から始まった…

「何の依頼?」

「漁の手伝い」と「保育園での子供たちのお相手」の2つです」

「両方の依頼日は?」

「共に今度の土曜日です」

「よし桜華、アンタは漁の方に行きなさい…」

「言うと思った…」

確かに女の子に漁は辛いしな…

「アタシ達は保育園の方に行くから♪」

「了解」

「ちなみに報酬として新鮮な魚介類をくれるそうです」

おいまで、東郷それを言ったら!

「よーし!!桜華きっちり働いてがっぽり報酬貰ってきなさい♪」

ほら風が釣れた…

「時間的にも共にお昼で終わりますね」

東く郷く…だからそんなこと言ったら…

「だったら終わったら桜華の家に集合してパーティーといきましょう♪」

駄目だ…完全に風が釣れた…東郷…もしかして狙ったか…

〜今に至る〜

これが俺が今ここにいる理由である・・・にしても

「おやじさん、普段もこんなに獲れるんですか？」

いくらなんでも獲れすぎている気が・・・

「普段はこんなに獲れたもんじゃないな、今日あんたが来たから獲れているな。」

・・・すみません他の漁師のみなさん、今度依頼が来たら本気で手伝います。

「まあこんだけ獲れば十分だろ。報酬出しても余りまくるからな！」

さすがプロ、引き際をわかってらっしゃる。

~~~~~

漁から町に帰ってきて、片付けも終わり・・・

「にいちゃん、これ報酬だ！部のみんなで食ってくれ！」

「いいんですかこんなにいただいて？」

いくなんでも多すぎる気がするが・・・クーラーボックスから魚のしつぽがはみ出てるし・・・

「にいちゃんが来てくれたから大量だったからな！これぐらいやらないとにいちゃんの割りが合わないんだよ！遠慮せず持つてくれ」

W

「そこまで言うのでしたらお言葉に甘えていただきますね。」

「あとこれも持つていけ」

そう言われて渡されたのは真空パックで中にはイカのゲソらしきものが入っていた

「勇者部の皆で食ってくれや♪」

何だろう・・・これがいきなりヤバいものだと感じてきた・・・

「・・・ではまた依頼があれば」

「おうまた頼むわ♪」

~~~~~

「連絡も終わりつと・・・まだ向こうはかかりそうだな」

風達に連絡も終わり家に戻ろうとしたとき・・・

「…これは…何かを振ってる音？海からだな…時間もあるし行ってみるか」

「はあはあ…まだ足りない…まだ！私は完璧な勇者に！ならないと！」

…あの子が…剣道にしては2刀流だし、それに今【勇者】って!?

「君「何よ!？」練習中声かけてごめん、【大赦】関係なのかな…?」

「アンタ何者？只の不審者じゃないようね」

「現勇者と言ったら…」

「っ！ことは讃州中学の…」

【大赦】からはある程度こっちの情報はいってると…

「申し遅れたな…黒崎桜華だ讃州中学勇者部3年だ、よろしくな」

「三好夏凜よ…」

三好ってことは…【あの人の】妹かな…

「で、何よ邪魔しに来たの？」

「違うよ、特訓？してるから気になって見に来たんだよ。それに…」

「それに…?何よ?」

聞き返されながら落ちている木刀を拾い

【今】の君の力見せてほしい」

「いくらなんでも3、4日で勇者になったばかりのアンタには負けな  
いわよ!!」

「それは勝ってから言うべきだね…さあどこからでもかかってきなよ  
4」

## お知らせ

勇者部と黒い桜の閲覧してくださる皆さまには感謝しております。  
今回のお知らせはこの作品をゼロから書き直そうと思ったこと  
です。

理由としてはわしすの小説がついに買えたことが大きく関係して  
いるのです。

これを機会に一新して書き直します。オリ主の名前はたぶんその  
ままですが・・・

ちなみにこの『勇者部と黒き桜の勇者』はしばらくはこのまま残し  
ておきます。

では皆さま新しいのができ次第あげますのでよかったですらどうぞ。

以下文字稼ぎ

ああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああああ

